

平成19年11月の解説（週間天気予報）

【11月の天候状況】

上旬は、高気圧に覆われて晴れの日が多くなりましたが、旬半ばには日本の南海上を東へ進んだ低気圧の影響で東日本、西日本では雨が降りました。一方、沖縄・奄美地方では前線の影響で雨の日が続きました。中旬は旬はじめに低気圧がサハリン付近を通過したため北日本、東日本で雨や雪が降りました。その後は下旬前半まで冬型の気圧配置が多くなり、日本海側の地方と北日本では雨や雪の日が、太平洋側の地方では晴れの日が多くなりました。下旬の後半は日本の南海上を東へ進んだ低気圧や前線の影響でほぼ全国的に曇りの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、北日本、東日本日本海側、西日本で多く、東日本太平洋側では平年並、沖縄・奄美ではかなり少なくなりました。降水量は北日本太平洋側と沖縄・奄美で平年並のほかは、ほぼ全国的に平年より少なくなりました。気温は全国的に平年並でした。

【11月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年^{（注）}より8ポイント高い79%でした。全ての地方で例年より高く、特に中国、四国、九州北部、九州南部地方では10から17ポイント高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は、ほぼ全ての地方で例年を下回りました。特に近畿、中国、四国地方では0.5から0.6小さく、全国平均は例年より0.2小さい2.1でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は東海、近畿、九州北部地方で例年より0.3小さく全国平均では例年より0.1小さい2.1でした。（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【11月の週間天気予報から】

天気予報を作成する場合、気圧配置などの予報対象日のおおまかな大気の状態の予想を元に、対象とする地域の気象特性などを考慮して雲や降水など具体的な現象の推移を判断し天気を予想します。

図1は11月24日21時の観測資料をもとに6日後の30日21時の気圧配置を予想した図です。気圧の低い部分が日本の南海上で幅広い降水域を伴って北東から南西にのびていることから、この付近に前線が停滞すると推定しました。このため、この前線の影響を受けて太平洋沿岸の地方を中心に雨が降る可能性が高いと判断し、25日（5日前）に東京地方に発表した週間天気予報では、30日の天気をくもり一時雨と予報しました。

実際の気圧配置（図2）を見ても、黄海沿岸の高気圧、カムチャッカ半島の東の発達した低気圧、日本の南海上の停滞前線などのおおまかな気圧配置は、5日前の予想とほぼ一致しています。ところが予想に反して東京地方では小雨は降ったものの1mm以上の雨は降りませんでした。日本の南海上にある前線と低気圧から北にひろがる雨雲が関東南岸にかかりましたが、1mm以上の降水を観測したのは千葉県や茨城県の一部に限られたためです（図3）。

この事例のように数日前から気圧配置がほぼ予想できる場合でも、1mmに満たない小雨となるか、1mm以上の雨となるかなど天気を正確に予想することは簡単なことではありません。

【1月の週間天気予報の利用にあたって】

1月後半から2月前半にかけては、1年のうちで最も気温が低い時期です。強い冬型の気圧配置となって強い寒気が日本付近まで南下してくると、西日本の平野部でも氷点下になることがあります。気温が氷点下になると地表面の水分が凍り、最高気温が上がらないと氷はなかなか溶けません。この状態が何日も続くと凍結による被害が拡大します。週間天気予報で気温が低い状態が続く予想となっているときは、特に最新の情報に注意して、低温に対する早めの対策を怠らないようにしましょう。

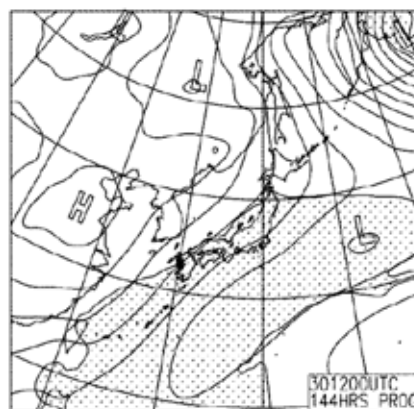


図1 11月25日に使用した30日21時の予想気圧配置
水玉模様は降水を予想した範囲

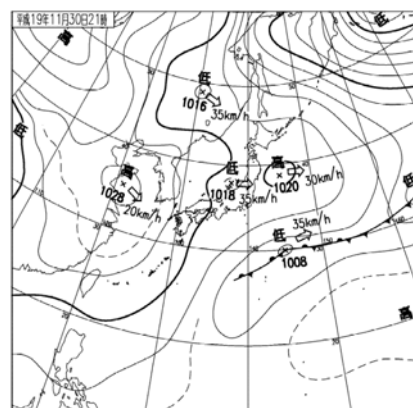


図2 11月30日21時の地上天気図

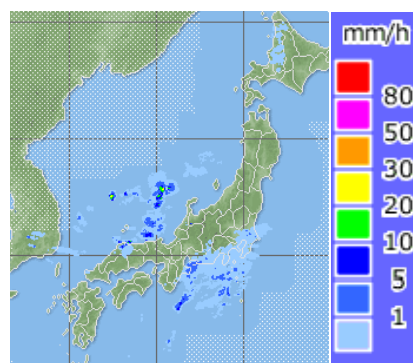


図3 11月30日15時の解析雨量
(前1時間)